

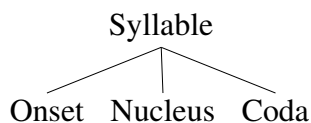
要旨

音節の内部構造に関して、音節を構成する各分節音が対等に並ぶとするフラットモデル、音節がオンセットとライムに分かれライムが核とコーダに分かれるとするオンセット・ライムモデル、音節がボディーとコーダに分かれボディーがオンセットと核に分かれるとするボディー・コーダモデルなどが提案されている。東南アジア大陸部諸語の音節はオンセット・ライム構造を持つことが多いとされるが、その証拠が検討されることはほとんどないようである。本発表では、ジンポー語(シナ・チベット語族: 北ビルマ)を対象に、この言語の音節が音韻的単位をなすことを示したあと、音節の内部構造がオンセットとライムの階層構造を持つことを示す証拠を検討する。結論は次の通りである。オンセットが音韻的単位をなす証拠として、(a) オンセット内のみに観察される音素配列制約、(b) オンセットをターゲット構造とするルドリング、(c) オンセットの関わるスピーチエラーがある。一方、ライムが音韻的単位をなす証拠として、(d) 声調付与のドメイン、(e) 音節量の決定、(f) ライム内のみに観察される音素配列制約、(g) ライムをターゲット構造とするルドリング、(h) 韻文における押韻の単位がある。

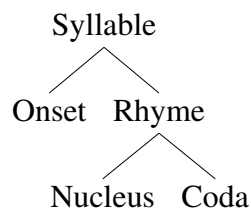
1 はじめに

音節の内部構造に関して様々なモデルが提示されている (Bosch 2011)。音節を構成する各分節音が対等に並ぶとするフラットモデル (Hockett 1955; Kahn 1980; Clements and Keyser 1983)、音節がオンセットとライムに分かれライムが核とコーダに分かれるとするオンセット・ライムモデル (Pike and Pike 1947; Fudge 1969; Selkirk 1982; Duanmu 2009; and many others)、音節がボディーとコーダに分かれボディーがオンセットと核に分かれるとするボディー・コーダモデル (McCarthy 1979; Wang and Cheng 2008) などである。

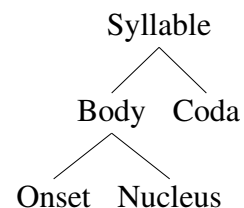
(1) フラットモデル



(2) オンセット・ライムモデル



(3) ボディー・コーダモデル



東南アジア大陸部諸語の音節は、オンセット・ライム構造を持つことが多いとされる (Enfield 2018: 56)。だが、個別言語についてその証拠が検討されることはほとんどないようである。例えば、Okell (1969: 4–22) のように可能な音節構造のリストを示したものや、Enfield (2007) や LaPolla (1996) のように音節のテンプレートを示したものはある一方、音節内部構造への言及がない研究は珍しくない。また、Coupe (2007: 23–5) のように、音節がオンセット・ライムの内部構造を持つことを述べるものの、その証拠について言及のない文献も多い。東南アジア言語学

会のジャーナルである JSEALS に掲載された過去の論文のうち、タイトルに音韻論 (phonology, phonological) とつくすべての文献 (2018 年まで) を調べたところ、音節構造の記述については上述のどれかのパターンのものが大半であり、管見の限り、音節内部構造に詳しく言及したものはなかった。

同様の状況はジンポー語 (シナ・チベット語族 : 北ビルマ) の先行研究にも当てはまる。Hanson (1896: 18) のような初期の研究では、音節に関してジンポー語に単音節語と二音節語が多いことしか述べていない。また、戴・徐 (1992: 5–7) や戴 (2012: 16–8) のような近年の研究も、声母 (オンセット) と韻母 (ライム) のリストを提示するにとどまり、音節構造への言及がほとんどない。Kurabe (2017) でも音節のテンプレートはまとめているが、その内部構造については触れていない。

2 音節

2.1 テンプレート

ジンポー語の音節は (4) の線状的構造を持ち、(5) のような例が観察される。

(4) 音節のテンプレート : $\sigma = C_1(C_2)V(C_3)/T$

- a. C_1 = すべての子音 (ただし、 C_2 が占められていないとき)
- b. $C_2 = r, y$
- c. $V = i, e, a, o, u, \emptyset$
- d. $C_3 = p, t, k, \text{?}, m, n, \eta, w, y$
- e. $T = L$ [31], M [33], H [55], F [51]

(5) 音節構造の例

- a. CV /yé/ 「掃く」
- b. CVC /duŋ/ 「座る」
- c. CCV /pru/ 「出る」
- d. CCVC /phrɪŋ/ 「満ちる」

2.2 音韻単位としての音節

世界の言語で音節が音韻的単位 (構成素) をなすことの証拠が検討されている (Blevins 1995)。ジンポー語の音節が音韻的単位をなすことは、以下の証拠から確認することができる。

(6) 母語話者の直感

e.g., ngay は 1 音節、galo は 2 音節、pəlâmláʔ は 3 音節。14 人中 14 人が同一の回答

(7) 声調拡張のドメイン

e.g., lù → ń-lù 「得ない」, phrɪŋ → ń-phrɪŋ 「吠えない」, gəlù → ń-gəlù 「長くない」

(8) 音節境界 (syllable edge) での音素の中和 (音節末での無声無気化)

e.g., bá 「疲れる」, pa 「平らな」, pha 「何」, lùp 「埋まる」 (*lùb, *lùph)

(9) ターゲット構造としての音節

a. 部分重複は末尾音節がターゲット

e.g., gəlo 「する」 → gəlo-lo, ginsúp 「遊ぶ」 → ginsúp-súp

b. ルドリング (言葉遊び) は各音節がターゲット

e.g., *ɲay* 「私」 → *ɲay say*, *çàt* 「飯」 → *çàt sàt*, *gìnsúp* 「遊ぶ」 → *gìn sìn súp súp*









c. 単音節のみをターゲットとする接辞

e.g., pyo 「楽しい」 → ɕə-pyo 「楽しませる」, gəbu 「嬉しい」 → *ɕə-gəbu

(10) 韻文における最小単位 (同一数の音節が一定数反復される)

e.g., tsun ʔay gà phéʔ m̀n̄j ləlèʔ, ɕədúm gà phéʔ m̀n̄j jəphrèʔ,
mətsan ʔay mərə khray ɕəgún, ɕəj̀yá dá ʔay phéʔ khá báj jún

(11) メロディーに対する歌詞の配置 (Text-setting)

e.g.,        

gə rày gə sàŋ phé? kúnj dón mù?

3 音節內部構造

本節では、ジンポー語の音節 ($C_1C_2VC_3$) が、フラットな構造を持つのではなく、 C_1C_2 からなるオンセットと VC_3 からなるライムに分割され、以下の階層構造を持つことを示す証拠を検討する。

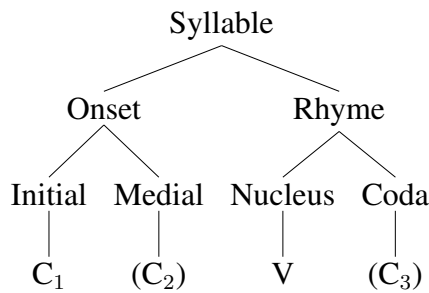


図 1: ジンポー語音節の階層構造

3.1 声調付与

ジンポー語は音節声調言語である。声調の付与にはライムの構成素構造(促音節 vs. 非促音節)が重要な役割を果たす。一方、オンセットの種類は考慮されない。

(12) 声調の種類

(13) 声調の分布

a.	L	[31]	/mù/ 「見える」	mù? 「曇る」	CV	+	+	+	+
b.	M	[33]	/mu/ 「うまい」		CVR	+	+	+	+
c.	H	[55]	/mú/ 「仕事」	mú? 「雷」	CVT	+	-	+	-
d.	F	[51]	/tîm/ 「～が」		注：R = 共鳴音、T = 阻害音				

注：R = 共鳴音、T = 阻害音

3.2 音節量

ジンポー語は quantity-sensitive な言語であり、音節量に基づく軽音節と重音節のカテゴリカルな対立がある。例えば、軽音節は内容語になれない(最小語条件)。また、声調の種類は、軽音節で限定的であり、重音節で非限定的である。通言語的にそうであるように、音節量にはライムの構造 (e.g., V vs. VV, VC) が関与し、オンセットの構造 (e.g., C vs. CC) は関与しない。

(14) 音節量

- a. 軽音節 [V, N] (e.g., [ə], [m], [ŋ], [p], [ŋ])
 b. 重音節 [VV, VC] (e.g., [a:], [ai], [am])

3.3 音素配列制約

音節内の位置間に見られる配列制約は、これらの位置自体が構成素をなすとき、より強固であるとされる (“collocational restrictions” by Fudge 1969; “immediate constituent” principle of phonotactics by Selkirk 1982)。ジンポー語音節の音素配列に関する制約は、オンセット内またはライム内に見られるが、オンセットとライムにまたがる制約は基本的に認められない。

表 1: オンセットの組み合わせ

	p-	ph-	b-	t-	th-	d-	k-	kh-	g-	m-	n-	ŋ-
-r-	pr	phr	br	*tr	*thr	*dr	kr	chr	gr	*mr	*nr	*ŋr
-y-	py	phy	by	*ty	*thy	*dy	ky	khy	gy	my	ny	*ŋy

表 2: ライムの組み合わせ

	-∅	-p	-t	-k	-ʔ	-m	-n	-ŋ	-w	-y
-a	-a	-ap	-at	-ak	-aʔ	-am	-an	-aŋ	-aw	-ay
-e	-e	-ep	-et	-ek	-eʔ	-em	-en	-eŋ	*-ew	*-ey
-i	-i	-ip	-it	-ik	-iʔ	-im	-in	-iŋ	*-iw	*-iy
-o	-o	-op	-ot	-ok	-oʔ	-om	-on	-oŋ	*-ow	-oy
-u	-u	-up	-ut	-uk	-uʔ	-um	-un	-uŋ	*-uw	-uy
-ə	-ə	*-əp	*-ət	*-ək	*-əʔ	*-əm	*-ən	*-əŋ	*-əw	*-əy

3.4 ルドリング

ルドリングの1つとして入力のアオンセツをターゲット構造とするものがある。ここではアオンセツが単子音であれ複子音であれ、同様の操作を受ける。(日本語の類似現象にバビブ語(バビ語)がある(原口 1982)。)

(15) アオンセツがターゲット

入力	→	出力	意味
ráy	→	ráy sáy	「です」
pyo	→	pyo so	「楽しい」
phroŋ	→	phroŋ soŋ	「逃げる」
khrát	→	khrát sàt	「落ちる」

ルドリングにはライムをターゲット構造とするものもある。ライムが開音節であれ閉音節であれ、同等の操作を受ける。

(16) ライムがターゲット

入力	→	出力 (-e 型)	出力 (-oy 型)	出力 (-ay 型)	意味
ŋay	→	ŋe	ŋoy	ŋay	「私」
gò	→	gè	gòy	gày	「～は」
sa	→	se	soy	say	「行く・来る」

3.5 スピーチエラー

スピーチエラーは音節内部の構成素構造に示唆を与えることが知られている(e.g., Fudge 1987, cf. Davis 1989)。ジンポー語の(17)のようなエラーでも、アオンセツがまとまりのある単位としての振る舞いを見せる。

(17) スピーチエラー

入力	→	出力	意味
khà? lù?	→	khà? gù?	「水を飲む」
tsun say	→	cun çay	「もう言った」
dəgúp	→	dəjúp	「覆う」
ləwàn lədən	→	gəwàn gədən	「速く」
bo jà?	→	byo jà?	「頭が固い」
khà?-lùp-phuŋ	→	khà?-lùp-phyuŋ	「浸礼教会」
?óbrân	→	?óbyân ~ ?óbân	「人名」

3.6 押韻

詩歌などの韻文は、規則的な韻律と韻を踏んだ詩行で特徴づけられる。韻文は句末で押韻し、押韻ではライムのみが考慮される。ただし、声調は考慮されない(戴 2012: 419–20)。2.2 節で述べた通り、韻文における最小単位は音節であり、同一数の音節が一定数反復される。

(18) 押韻

- a. ʔəsì gəja gò phún **rù**, məçà gəja gò gənù
「よい果実は木の根、よい人は母」
- b. dùmsu man ʔè doro **dùm**, reŋ ʔay gò tsun majoy **súm**
「牛の前で弦を弾く、素晴らしい言葉が無駄になる」
- c. mà çà ráy tím səlaŋ **duŋ**, khàʔ çì ráy tím ləʔiŋ **sùŋ**
「子どもであっても大人の地位に座る、小川であっても水たまりが深い」
- d. gùmrà gò **gun ʔay**, məguy gò **dun ʔay**
「馬は運ぶ、象は曳く」
- e. gà gò **tàp tàp**, çàʔ gò **ʔnyàp ʔnyàp**
「言葉はべらべら、ご飯はべちょべちょ」

4 まとめ

本稿では、ジンポー語の音節が音韻的単位をなすことを示したあと、音節の内部構造がオンセットとライムの階層構造を持つことを示す証拠を検討した。

(19) オンセットが音韻的単位をなす証拠

- a. オンセット内のみに観察される音素配列制約
- b. オンセットをターゲット構造とするルドリング
- c. オンセットの関わるスピーチエラー
ライムが音韻的単位をなす証拠
- d. 声調付与のドメイン
- e. 音節量の決定
- f. ライム内のみに観察される音素配列制約
- g. ライムをターゲット構造とするルドリング
- h. 韻文における押韻の単位

オンセット・ライム構造の特徴を捉えることは、分節音連続の音韻解釈に有効である。例えば、Hanson (1896) や Maran (1971) などの研究は、二重母音 [ui] を /wi/ と解釈し、/w/ を C₂ と見る (e.g., gwi 「犬」)。しかし、本稿で見た様々な証拠は、[ui] が /ui/ または /uy/ であることを示唆する (e.g., gui ~ guy)。

- (20)
- a. 音素配列：正真正銘の C₂ (r および y) と異なり、w はすべての C₁ と結合可能
 - b. 音素配列：[ui] の [u] は後続要素との間に配列上の制約を持つ
 - c. オンセットのルドリング：gri → si vs. gwi → swi
 - d. ライムのルドリング：gri → gre vs. gwi → ge
 - e. スピーチエラー：gwi → gywi
 - f. 韻文における押韻：gwi は i ではなく wi と押韻する

(附記)

本稿は科学研究費補助金 (課題番号 17H04523) による研究成果の一部である。

参考文献

- Blevins, Juliette (1995) The syllable in phonological theory. In John A. Goldsmith (ed.) *The handbook of phonological theory*, 206–244. Cambridge, MA: Wiley-Blackwell.
- Bosch, Anna R. K. (2011) Syllable-internal structure. In Marc van Oostendorp, Colin Ewen, Elizabeth Hume, and Keren Rice (eds.) *The Blackwell companion to phonology*, Vol. II, 781–798. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Clements, George N. and Samuel J. Keyser (1983) *CV phonology: A generative theory of the syllable*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Coupe, Alec (2007) *A grammar of Mongsen Ao*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 戴慶厦 (2012) 『景頗語參考語法』 北京: 中国社会科学出版社.
- 戴慶厦・徐悉艱 (1992) 『景頗語語法』 北京: 中央民族学院出版社.
- Davis, Stuart (1989) On a non-argument for the rhyme. *Journal of Linguistics* 25: 211–217.
- Duanmu, San (2009) *Syllable structure: The limits of variation*. Oxford: Oxford University Press.
- Enfield, Nick J. (2007) *A Grammar of Lao*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Enfield, Nick J. (2018) *Mainland Southeast Asian languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fudge, Erik (1969) Syllables. *Journal of Linguistics* 5: 253–286.
- Fudge, Erik (1987) Branching structure within the syllable. *Journal of Linguistics* 23: 359–377.
- Hanson, Ola (1896) *A grammar of the Kachin language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- 原口庄輔 (1982) 『ことばの文化』 東京: こびあん書房.
- Hockett, Charles F (1955) *A manual of phonology*. Baltimore: Waverly Press.
- Kahn, Daniel (1980) *Syllable-based generalizations in English phonology*. New York: Garland.
- Kurabe, Keita (2017) Jinghpaw. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, 2nd Edition, 993–1010. London and New York: Routledge.
- LaPolla, Randy J. (1996) *A grammar of Qiang*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Maran, La Raw (1971) Burmese and Jingpho: A study of tonal linguistic processes. In Frederic K. Lehman (ed.) *Occasional papers of the Wolfenden society on linguistics*, vol. 4, 1–210. Urbana: Center for Asian Studies, University of Illinois.
- McCarthy, John J. (1979) On stress and syllabification. *Linguistic Inquiry* 10: 443–465.
- Okell, John (1969) *A reference grammar of Colloquial Burmese*. London: Oxford University Press.
- Pike, Kenneth L. and Eunice V. Pike (1947) Immediate constituents of Mazateco syllables. *International Journal of American Linguistics* 13: 78–91.
- Selkirk, Elisabeth O. (1982) Syllables. In Harry van der Hulst and Norval Smith (eds.) *The structure of phonological representations*, Vol. 2., 337–383. Dordrecht, The Netherlands: Foris.
- Wang, Min and Chenxi Cheng (2008) Subsyllabic unit preference in young Chinese children. *Applied Psycholinguistics* 29: 291–314.